



# 国立民族学博物館 友の会ニュース

MINPAKU ASSOCIATES NEWSLETTER

No. 292

2025.5▶6

「国立民族学博物館友の会」は「みんぱく（国立民族学博物館）」の活動を支援し、博物館を楽しく、積極的に活用するためにつくられました。

発行日 2025年5月1日  
編集・発行 公益財団法人千里文化財団

## 新館長よりご挨拶

今年度より国立民族学博物館第七代目館長に就任された関雄二新館長から友の会のみなさまへメッセージをいただきました。



じのみんぱくの姿は博物館かもしれません。展示される資料は、研究者がフィールドで自ら収集し、あるいは映像や音響の作品として制作してきたものばかりです。集積された資料の総量と、展示空間の規模は世界最大級といえます。

近年、みんぱくでは、研究者と研究対象社会の人びととともに研究するようなプログラムを開発し、その一部は展示場にも活かされています。さらには、国連が定めるSDGsの精神にのっとり、誰もが取り残されることのない展示空間にすべく、資料や案内の提示方法や移動手段としての機器類の開発を進めています。

とはいえ、こうした研究や研究成果の発表は一方的であってはならないと思っています。友の会のみなさまにおかれましては、これまで以上に忌憚のないご意見を頂戴し、みんぱくの活動のために活かしたいと考えています。

国立民族学博物館長 関雄二

令和七年四月一日付けで、第七代の国立民族学博物館（みんぱく）の館長に就任いたしました関雄二です。みんぱくは、文化人類学・民族学とその関連分野の研究を推進する大学共同利用機関として、一九七〇年万博の跡地に建てられ、昨年、創設五〇周年を迎えました。これまで、みんぱくの研究者は、世界各地で現地調査をおこない、人類の文化の多様性と普遍性に関する研究を推進し、まさに万博のレガシーを担ってきました。



上：墓から出土した大型巻貝を手にする 2022年  
下：墓の出土品を地元の人に説明する 2023年  
(ペルー北高地ラ・カビーヤ遺跡  
◎パコパンバ考古学調査団)

### 関雄二 館長

専門はアンデス考古学、文化人類学。2005年から発掘調査を続けるパコパンバ考古学プロジェクトチームを率いる。著者に『アンデスの考古学』（同成社）『アンデスの文化遺産を活かす——考古学者と盗掘者の対話』（臨川書店）『文明の創造力——古代アンデスの神殿と社会』（KADOKAWA）など。

9月6日(土)の友の会講演会は、関新館長にお話しいただけます。  
詳細につきましては、次号「友の会ニュース」でご案内予定です。お楽しみに！

### 観覧料改定のお知らせ

2025年6月19日(木)より、展示観覧料が改定されます。  
観覧料改定に関する詳細は、みんぱくホームページをご参考ください。

<https://www.minpaku.ac.jp/news/id-59682/>

これに伴う友の会年会費やご利用内容の変更はございません。

今後とも変わらぬご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

### 開催中！ 初夏の特別展と企画展

みんぱく創設50周年記念特別展

## 民具のミカタ博覧会

—見つけて、みつめて、知恵の素—

会期：6月3日(火)まで  
会場：特別展示館



詳細はこちら▶

みんぱく創設50周年記念企画展

## 点と線の美学

—アラビア書道の軌跡—

会期：6月17日(火)まで  
会場：本館企画展示場



詳細はこちら▶

みんぱくビデオテークでは特別展と企画展の特別番組をご覧いただけます。  
展示とあわせてぜひご覧ください！

# 万博からみんなぱくへ

——そして、もうひとつの万博へ

講師 吉田憲司(民博館長)  
実施日 2025年1月25日(土)

今回の体験セミナーでは、国立民族学博物館館長であり、二〇二五年大阪・関西万博のシニアアドバイザーを務める吉田憲司先生を講師に迎え、一九七〇年大阪万博のレガシーとしての国立民族学博物館の意義や、象徴的存在である太陽の塔との関係について、文化人類学の視点からお話いただきました。吉田先生の語る歴史の流れは、一九七〇年から二〇二五年へとつながる万博の物語として、参加者の皆さんを惹きつけました。今回は、万博記念公園事務所および万博記念公園マネジメントパートナーズのご協力で、太陽の塔の特別な解説付き見学会が実現しました。まず、万博記念公園事務所の進士肇所長が、二〇一八年に再生された太陽の塔の概要を解説され、続いて「地底の太陽」前で、吉田先生がその歴史的背景を語られました。参加者は熱心に耳を傾けながら、万博の象徴が持つ意味を再認識する機会となりました。



吉田先生による講演の様子  
撮影：事務局

自由見学を挟んだ後は、再び国立民族学博物館へ移動し、普段は館内職員が利用する職員食堂を特別に開放。ここで吉田先生の講演会と茶話会を開催しました。講演では、一九七〇年万博の理念がどのように現在、そして未来へと受け継がれていくかが語られました。茶話会では、太陽の塔の世界遺産登録を目指す動きについての話題も上がり、和やかな雰囲気の中、充実したひとときを共有することができました。本セミナーを通じて、一九七〇年大阪万博とみんなぱくの深い関係性への理解が深まり、そして二〇二五年大阪・関西万博への期待が高まりました。(文・事務局)

※所属・肩書はセミナー実施時のものです。

# コーヒー賛歌

——香りを聞き、音を味わう

講師 水川佐保(UCCコーヒーアカデミー専任講師)  
西尾哲夫(民博名誉教授)  
岡本尚子(民博特任助教)  
岡本祥子(ピアニスト)  
実施日 2025年3月16日(日)  
協賛 UCCジャパン株式会社

香り高いコーヒーを味わいながら、その奥深い世界に触れる——そんな贅沢な時間が広がりました。飲み比べを通じて、歴史や文化、音楽とともにコーヒーの魅力を巡るひとときとなりました。

ワークショップでは、六種のストレートコーヒーを飲み比べ、「アラビカ種」と「ロブスタ種」の違いや、精製・焙煎・産地・環境が味に与える影響について学びました。焙煎による色の違いや銘柄ごとの味わいを体感し、コーヒーの多様性を理解することで、自分好みの味わいを見つけるための基礎を培いました。



続く講演では、西尾先生がフランスの東洋学者アントワヌ・ガランによる『コーヒーの起源と普及について』をもとに、コーヒーの起源に関する伝説を考察。この書にはアルジャズイリー著『コーヒーの合法性への最良の弁明』を紹介するだけでなく、ガラン自身が中東で観察した内容も含まれています。アラブ世界でのコーヒーの飲用は、イスラム神秘主義の修行僧・スーフィーの宗教実践として始まったとされており、これは一六世紀以降のカイロ



におけるコーヒーハウスの隆盛や、度重なるコーヒー禁止令とも深く関わっています。アルジャズイリーの論考は、当時のイスラム法学の観点からコーヒーの合法性を擁護する最良の方便であり、流弊の理由は他にないのでないかという見解が示されました。

会場が静まり、岡本祥子さんが奏でるピアノが響き渡ると、エチオピア・ゲイシャの香りとともに音楽の時間が始まりました。岡本先生の解説では、コーヒー愛好家として知られるバルザックがシヨパンとリストを「天使」と「悪魔」にたとえた逸話や、ドビュッシーがワーグナーの影響を脱し、フランス古典音楽や一八八九年のパリ万博で出会ったインドネシアのガムラン音楽から刺激を受けた話などが語られました。また、パリ最古のカフェ「ル・プロコップ」の誕生に触れ、カフェが芸術家や思想家の交流の場となり、今もなおパリ文化において重要な存在であることが紹介されました。

締めくくりには、ワークショップ講師のUCC・水川先生が、世界初の缶コーヒー「ミルクコーヒー」の誕生秘話を紹介し、一九七〇年の大阪万博を契機に広まり、今も愛され続けるロングセラー商品であること、その人気の理由が「手軽さ」と「美味しさ」にあることが語られました。最後に参加者にはコーヒーの苗木が贈られ、「自ら育てる」ことを通して、コーヒーの未来を身近に感じる記念品となりました。

こうして、味覚だけでなく知識や感性を刺激する特別な時間は、静かに幕を閉じました。(文・事務局)



写真すべて、撮影：事務局

## 館内催し 会員先行予約

該当期間中に友の会事務局までご連絡ください。催しの詳細、その他催しに関する情報は、みんぱくホームページや『月刊みんぱく』をご確認ください。

みんぱく催し

<https://www.minpaku.ac.jp/event/>



### みんぱく映画会

フォトコピー

6月8日(日)13:30~16:00(開場12:30)

講師：相島葉月(民博准教授)

友の会先行受付:4月28日(月)~5月2日(金) 定員70名

申込先着順/本人を含む2名まで

みんぱく友の会事務局(千里文化財団内)

電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

### 友の会会員限定企画!

## 中牧先生の理事長サロン

みんぱく友の会を運営する千里文化財団の理事長は、友の会会員のみなさんにもおなじみ、みんぱく名誉教授の中牧弘允先生です。友の会へのご要望や研究分野へのご質問に、中牧理事長が答えます。今回のサロンは、友の会講演会終了後に対面で開催。長年にわたり文化人類学および日本学の研究に取り組まれてきたヨーゼフ・クライナー先生をお迎えし、名誉教授・久保正敏先生にもご同席いただきます。みなさま、ぜひご参加ください。



中牧理事長

日時：6月7日(土)15:30~16:30

会場：第5セミナー室(予定)

事前申込制。

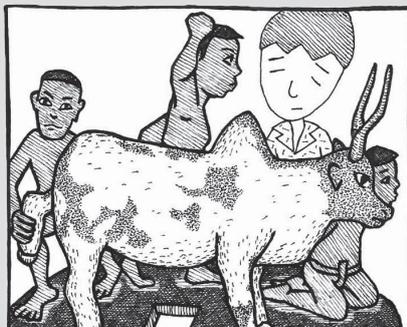
当日受付にて会員証をご提示ください。



申込はこちら

## ぼくのみんぱく日記

画・中川洋典



四月十七日(金)  
マカガスカルン  
民族マハファ  
リン基標  
ガス。後ロ  
三人ハ一体何  
ヤツテイ  
ルノカナ?

## 友の会講演会のご案内

お申し込みには、友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

### ■大阪

・会場、オンライン配信ともに事前申込先着順です。

・会員は会場参加に限り予約が不要です。会場受付にて会員証をご提示ください。

### ■東京

・事前申込先着順です。オンライン配信はございません。

※大阪・東京ともに会場での聴講は会員以外の方もご参加いただけます。

(参加費500円)

### 大阪

#### 第561回

## 昭和30・40年代の日本民族学界との出会い ——ヴィーンから奄美と阿蘇へ、そして民博へ至る

講師：ヨーゼフ・クライナー(ボン大学名誉教授)

日時：6月7日(土)13:30~15:00(開場13:00)

参加方法：①第5セミナー室での参加(定員70名) ②オンライン配信での参加

1958年にヴィーン大学民族学科に入学し、恩師アレクサンダー・スラヴィクのもとで岡正雄、石田英一郎、柳田國男、折口信夫の学説を学び、学友の住谷一彦と議論を重ねました。日本留学中は東京大学東洋文化研究所に籍を置き、南西諸島の調査に参加。沖縄で佐々木高明氏と出会い、梅棹忠夫氏の民博ビジョンに感銘を受けました。この経験を皆様と共有できれば幸いです。



受付フォーム <https://www.senri-f.or.jp/561tomo/>

### ご案内

終了後、同日15:30より開催の「中牧先生の理事長サロン」に、講師のクライナー先生をゲストとしてお迎えします。ぜひご参加ください!

#### 第562回

## 「島の宝」になった写真 ——阿波根昌鴻写真と伊江島の記憶

講師：高科 真紀(民博助教)

日時：7月5日(土)13:30~15:00(開場13:00)

参加方法：①第5セミナー室での参加(定員70名) ②オンライン配信での参加

沖縄本島北部にある離島・伊江島では、戦後、米軍による土地の強制収用によって、多くの住民が家や土地を奪われました。阿波根昌鴻(1901-2002)は、その実態を写真で記録し、生涯をかけて反基地・反戦平和を訴え続けました。近年、島の人の日常を捉えた写真も発見され、「島の宝」として注目されています。本講演では、阿波根の写真に焦点をあて、その記録性と文化的価値について考えます。



受付フォーム <https://www.senri-f.or.jp/562tomo/>

### 東京

#### 第139回

## みんぱく×ムサビ「民具で継がなるコレクション」

講師：加藤 幸治(武蔵野美術大学教授)

日時：5月24日(土)13:30~15:00(開場13:00)

会場：武蔵野美術大学 市ヶ谷キャンパス7階 コワーキングスペース「Ma」(定員50名)

共催：武蔵野美術大学 美術館・図書館

※オンライン配信はございません。

※武蔵野美術大学在学学生と同教職員の方は無料でご参加いただけます。

国立民族学博物館が所蔵する、民具研究黎明期のアチックミュージアム・コレクション。渋谷敬三に学んだ宮本常一が、戦後に若者たちと収集したムサビ・コレクション。それと同時代に大阪万博のために世界中から収集されたEEMコレクション。三つの民具コレクションから、アチックミュージアムが現代に残したレガシーを探ります。



受付フォーム <https://www.senri-f.or.jp/139tokyo/>

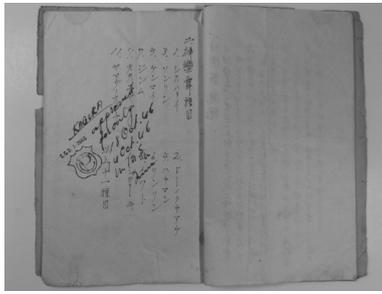
■第557回■2025年2月1日(土)

## GHQによる神楽台本の検閲

鈴木昂太(民博助教)

日本の各地では、「神楽」と呼ばれる芸能が伝承されています。神楽は、神にささげる歌や踊りのことで、神社などで太鼓や笛の奏楽に合わせて舞が舞われます。鈴や剣などの採物を手に持って舞うものもあれば、セリフを喋りながら物語を演じる一種の演劇的なものもあります。

そのうち中国地方の神楽では、第二次世界大戦後の占領期に、連合国軍最高司令官総司令部(略称GHQ/SCAP)の検閲を受けたことを歴史の一コマとして語る例があります。本講演では、こうしたGHQによる神楽台本の検閲がい



検閲済印が押された神楽台本(広島県安芸太田町猪山神楽団蔵)  
撮影:鈴木昂太、2018年7月14日

かにおこなわれ、その結果神楽の伝承にどのような影響が生じたのだろうか?という問題を、報告者による調査事例を基に考えていきました。

GHQに提出された神楽上演申請書には、A.「農村舞楽」として申請した事例と、B.「神楽」として申請した事例の2種類がありました。後者の台本を見てみると、定説とされてきた神道(神)の要素の禁止が、必ずしも求められていたわけではないことがわかります。また、特定の演目が禁止されることもありませんでした。

GHQによる神楽台本の検閲は、事実としてありました。しかし、戦後になって神楽の内容が変化したりとしても、それはほとんどが伝承者たちの「自制」であり、時代の空気を read した「付度」だったと思われる。そのため、GHQが神楽を禁止したという言説は、再考する必要があります。

こうした私の研究内容をお話し、会場からの質問にお答えして、議論を深めました。

■第558回■2025年3月1日(土)

## 布のオーセンシティブは誰が決めるのか

——インドの染色品アジュラクとその職人

金谷美和(国際ファッション専門職大教授)

インド・カッチ地方の伝統的染色品「アジュラク」を通じて、「布のオーセンシティブ(本物らしさ)」は誰が決めるのか?というテーマで講演しました。アジュラクは木版捺染技法を用いた幾何学模様で、もともとはイスラム教徒の牧畜民の衣装として用いられていました。

しかし、時代とともに技術革新が進み、スクリーン捺染や機械捺染による大量生産が行われるようになりました。その結果、「伝統技法による手仕事の価値が再評価され、「本物のアジュラク」とは何かが議論されるようになりました。職人たちは、オーセンシティブを担保する要素として「木版捺染」と「天然染料の使用」を重視し、行政の手工芸支援制度や地理的表示(GI)制度を活用してその価値を守ろうとしています。

一方で、スクリーン捺染の技術向上により、天然染料を用いた量産が可能になり、従来のオーセンシティブの基準が揺らいでいます。また、アジュラクのデザインが無断で利用されることも増え、生産者は

文化の盗用に対して異議を申し立てています。

オーセンシティブは、消費者の視点だけでなく、生産者の主体的な価値創出によっても決まるものです。伝統を守りつつ、新たな市場と共存する道を探ることが、アジュラクの未来にとって重要な課題となっています。

日本も、布工芸品のすぐれた技術を継承している国の一つで、海外のファッション産業から注目されています。私たちの国の文化や産業を守りつつグローバルな市場と共存することが求められるなか、アジュラクの生産者たちから学ぶことがあると思います。



アジュラクの制作をおこなうジャバル・M・カトリー氏  
撮影:金谷美和、インド・グジャラート州カッチ県、2022年12月31日

本紙掲載の情報は、2025年4月18日時点で決定している内容です。諸事情により急遽予定を変更する場合があります。

お問い合わせ、お申し込みはこちら

友の会はいつでも、どなたでもご入会いただけます。

国立民族学博物館友の会

公益財団法人 千里文化財団

〒565-8511

大阪府吹田市千里万博公園10-1(国立民族学博物館3階)

電話:06-6877-8893(平日9:00~17:00)

FAX:06-6878-3716

e-mail:minpakutomo@senri-f.or.jp

国立民族学博物館 最新情報



ホームページ  
https://www.minpaku.ac.jp/



Facebook  
https://www.facebook.com/MINPAKU.official/

国立民族学博物館友の会 最新情報



ホームページ  
https://www.senri-f.or.jp/minpaku\_associates/



Facebook  
https://www.facebook.com/minpakutomo/